Voice of friends

2020Annual Report

年次報告書

FRIENDS WITHOUT A BORDER

© Paul Wager

Compassionate care

すべてのことに思いやりの心を持って対応すること
どんな患者さんにも我が子を思うのと同じように接すること

これが私たちの信条です。

当団体に関わるすべての活動は
『Compassionate care』に基づき取り組まれています。

“ 国境なき友人たち ” 支援者の皆様へ

2020年は数百年に一度、とも言われる新型コロナウィルスの世界規模パンデミックに翻弄された年でした。犠牲になって亡くなられた方々のためにも1日も早くワクチンが普及し、また治療法も進歩することを願っています。
フレンズの事務局もまた感染を最小限に抑えるために在宅勤務と最小限、交代での出勤で対応してきました。感染を防ぐためのズームなどによるインターネットを通じての会議も1年が過ぎると慣れてきたようで、私のような年配でも扱えるようになってきました。社会活動やビジネスもこのように進化していくのでしょうか。
一方、私たちのラオ・フレンズ小児病院の活動においてもラオスが国境を閉じてはや1年を越えました。
ラオスの限られた医療事情により、日本や欧米よりも厳しい国境措置によってコロナ感染者は2020年度は2桁に抑えられ、死者においては皆無でしたが、今後の新型、変種ウィルスの影響が無いことを祈るばかりです。
国境封鎖の影響で、以前のような海外医療ボランティアの行き来ができなくなり、ラオスに居住する数人の外国人スタッフとラオス人スタッフのみによる運営を余儀なくすることとなりました。開院6年とは言え、まだスタッフの医療・看護教育は100%とは言い難い状況なので心配していましたが、外国人ボランティアの行き来が途絶えた状態が続くとラオス人スタッフの中から自然とリーダーシップを自覚するスタッフが現れ、一般診療と看護においては問題なく運営できるようになってきたのは嬉しい現実でした。
将来のラオス人による自立・運営を目指すラオ・フレンズ小児病院としては、奇しくもコロナ禍が現地スタッフに自立を自覚させる機会となったようです。
とはいえ、まだ高度医療分野においてはラオス保健省が定めた医療機関において3年間の研修を終了した医師は数人で、今後も医療教育に重点を置き続ける必要性を強く感じています。
そしてこれから5年以上のフレンズによる運営支援を続けるには、パンデミックの中でも病院運営基金を集め続ける必要があります。コロナ以前に開催してきたチャリティー・イベントなど、昨年以来全てできなくなりましたがインターネットを利用したバーチャル・イベントなどの可能性も模索して、ラオス北部唯一の小児病院であるラオ・フレンズ小児病院の健全な運営継続を目指しますので、支援者皆さまにおかれましても現在のような不安定な社会状況ではありますがご支援の継続を切にお願いいたします

井津建郎
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー
創設者

2020年はコロナ一色の1年となりました。世界中が初めての経験に試行錯誤しながらの日々であったように、ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）でも同様に大きな影響がもたらされました。ラオスでは、国境と国内の県郡をまたぐ移動を制限するロックダウンが3月下旬から1ヶ月以上も続き、その影響で来院する患者さんが急激に減少しました。幸いコロナ感染拡大は抑えられましたが、命をも脅かしかねない栄養失調やその他の感染症を抱える患者さんは、コロナ感染いかんに関わらずいるはずです。にもかかわらず来院することができない状態が続いたことには、とても気をもみました。
また、院内のスタッフ教育への影響もありました。スタッフの教育に携わっていた外国人の医療専門家ボランティアさんが全て帰国してしまったために、教育の時間が激減してしまったのです。将来、現地スタッフへ病院の運営を譲渡することが最終目標となっている私たちのプロジェクトでは、教育もまた活動の大きな柱ですから、対策を打ち出さねばなりませんでした。
しかしながら、こうした非常事態による経験は、LFHCにとっては大きな成長の時間であったと振り返ります。外国人ボランティアさんの帰国により、必然的に、各部署におけるラオス人スタッフへの責任が重くなりました。これまで常に近くで手取り足取りしてくれた専門家によるサポートがなくなってしまったので、それまでの経験と知識をフルに使って日々の診療に当たることに加え、各部署のチームをまとめるという管理業務も考えなければならなくなりました。
これらのことが、大きな一歩を踏み出す結果となったようです。すでに始めていたラオス人のリーダー育成ですが、そのリーダーシップが目に見えるようになってきました。自信を持つことの大切さ、自信で人々は輝くということを再認識しています。
コロナ禍は今しばらく続きそうな気配がしますが、『（コロナ禍）だからできること、（コロナ禍）だけどできること』に目を向けて、これから一体何が起こるのかを楽しみにしていたいと思います。
引き続き見守っていただけましたらとても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

赤尾和美
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
代　表

乳幼児から15歳までの子供たちを対象に、24時間態勢の救急病院として診療をおこなっています。

医療

ラオス

TREATMENT

コロナ禍の2020年は、ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）にとっても困難な年となりました。3月、世界保健機関（WHO）によるパンデミック宣言に従い、ラオス政府はただちに渡航規制を発令。LFHCの外国人ボランティアは皆、不確定な期間ラオス国内で立ち往生することを避けるため、48時間以内に自分の国へ退避しなければなりませんでした。LFHCでは急遽、現地に残ったスタッフでローテーションを組み換え、診療を継続するための態勢を整えました。また、コロナを見据えた新しい政策に迅速に対応できるよう、WHO職員や政府担当者、県立病院との連携を強化。スタッフの自宅待機、一部医療サービスの休止や延期等々、緊急事態における院内のガイドラインを作成した上での医療活動となりました。

国内のロックダウン措置があったため外来、救急とも患者数は激減しましたが、入院病棟と新生児病棟は前年同様に多忙でした。

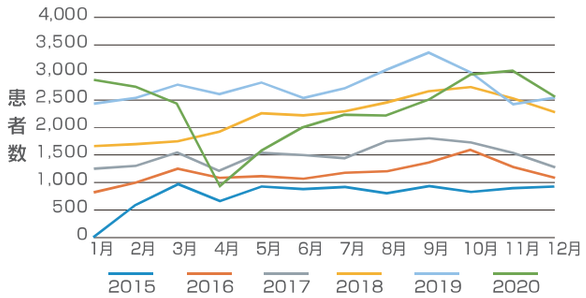
常時と異なる緊急態勢の中、ラオス人スタッフが目を見張るほどの能力を発揮し、患者さんのケアにあたることができたことは、彼らの大きな自信となったようです。思わぬ苦境が、スタッフの急成長を促すことにつながりました。それは、今後の病院運営を見据えた上での明るい希望となっています。

- コロナに対応するため、外来病棟の外にスクリーニングエリアを設けました。
- 外来病棟でスクリーニングを担当する看護師にPPE（感染予防具）を配布。コロナ感染の疑いがある患者さんを県立病院へ搬送するための研修を受けた上で対応にあたりました。
- 入院病棟の病床数を増加して対応しました。
- ラオス人医師が病棟回診を主導しました。
- 訓練中だったラオス人のみの夜勤を、ラオス人医師が担当し、行えるようになりました。
- 看護シフトリーダーは、やるべき仕事のすべてを、外国人の力を借りず自立して行えるようになりました。その結果すべての回診に同席する事になり、より積極的に患者さんに関わる機会が増えました。また、新たに5名の看護師がシフトリーダーに昇格。

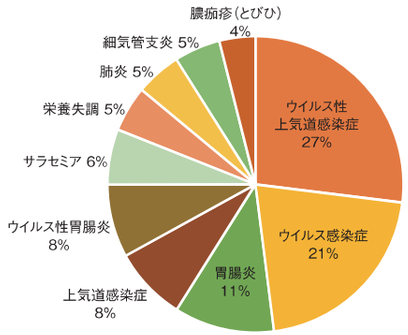
外来患者総数	18,936人（24%減）
入院患者数	2,885人（0.2%減）
新生児患者数	689人（1.3%増）
救急患者数	10,727人（9%減）
手術件数	1,188件（2%減）

※のべ人数

ラオ・フレンズ小児病院　来院患者数



来院患者の傷病の割合



医療

ラオス

TREATMENT

新生児病棟

新生児病棟はパンデミックの影響を受けにくいため、例年と変わらず忙しい状況が続きました。新生児を担当する医師のシフトは、診療数や複雑さに対応するために7時間から11時間に延長。加えて、高リスク出産に対応できるよう、新生児病棟の担当医の増員も行われました。高い需要があった保育器も購入し、患者さんすべてに必要なケアを提供するため、状況に応じて最善を尽くしています。

また、隣接する県立病院の産科との連携強化にあたり、周産期会議を設けました。新生児の患者さんの受け入れは、出産とは切り離せません。双方のスタッフが共に態勢を見直し学ぶことで、コミュニケーションをスムーズにし、よりよいケアにつながるはずです。県立病院の産科とLFHC手術室に電話回線をつなぎ、緊急時の態勢も整備。緊急時には、LFHCから救命処置を施すための機材を提供することになりました。

専門外来 発達・障がい児クリニック

年間で380名の患者さんが通院しました。新規は134名、他は継続して通院している患者さんです。患者さんのうち40%は脳性麻痺の子供たち。発達スクリーニングや非言語コミュニケーションを含めた言語発達遅延をサポートできる理学療法士1名と、チャイルド・ライフ・セラピスト1名が中心となって対応しています。その他に医師5名、看護師3名でチームを組んでいますが、スケジュールが許される時には他の医師が加わり、神経学的検査や発達アセスメントについても学んでいます。提供する治療のレパートリーが大幅に拡大し、運動機能の回復にとどまらず、日常生活の質を改善することにも着目してケアサポートを行うようになりました。

また、子供たちのために50台の車いす寄贈がありました。この車いすは、ラオスの農村部で使用するのに適したモデルで、成長に合わせて調整も可能なため、とても役立っています。

専門外来 サラセミアクリニック

サラセミアは多くの場合、定期的な輸血処置を必要とする血液疾患です。しかし、コロナの感染拡大により、これまで献血をお願いしていた外国人駐在員や観光客がいなくなり、輸血用の血液が慢性的に不足する事態に陥ってしまいました。症状が悪化し入院しなければならない患者さんがいたり、遠方から訪れた患者さんが血液を待って長くルアンパバーンに滞在することになったり、困難な状況ではありましたが、定期的に献血キャンペーンを開催するなどして善処。年間で297名の治療を行いました。

また、ビエンチャンの小児血液専門医が主催するサラセミア会議に、LFHCからもサラセミア担当チームが参加。問題点を共有し、薬剤や資料の提供を受けることもできました。院内では、スタッフ向けのより充実したトレーニングプログラムを考案し、実施しています。

感染対策

コロナの感染拡大があったことから、院内ではより強固な感染予防対策が求められ、LFHC感染予防委員会が立ち上げられました。当委員会の観点からLFHCスタッフの業務の質を見直し、サービス向上と衛生を保てるように舵取りを行います。委員会メンバーは、医師、看護師、滅菌技師で構成。これまでに、ハウスキーピングマネージャーの必要性や、手術前に患者さんが待機できる場所の確保など、いくつかの改善すべき点が指摘されました。

また、コロナ禍における物資不足（薬品や医療機器、フェイスマスクやアルコールなど感染予防のための消耗品など）を予測し、調達チームが在庫確保を推進。それにより、物資が不足することなく感染対策ができました。実際、県立病院で感染予防のための消耗品不足があった際、LFHCよりサポートすることもできました。

院内スタッフはもちろん、国内の医療従事者にも研修やトレーニングを実施し、国全体の医療レベル向上に貢献しています。

EDUCATION

教育

ラオス

ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）の大きな役割のひとつに医療教育があります。単に医療を提供するにとどまらず、現地の医療スタッフを教育し、育てることが大切だと考えているからです。

2020年はコロナの影響により、教育活動の一部は縮小せざるを得ませんでした。指導役である外国人ボランティアが不在となってしまったためです。しかし、基礎教育に関しては、Facebookのメッセンジャーやリモートシステムを活用した遠隔教育を実施するなどして、継続することができました。また、ジュニア医師1人あたり月8時間の教育時間であったものを16時間確保できるように調整し、定期的な臨床教育なども含めて、教育が滞らない工夫も施されました。

看護教育の大半はラオス人が主導して実施。コロナ禍において、状況に応じた新しい手法を取り入れるなどフレキシブルに対応する必要がありましたが、その努力が教育を途切れさせない結果につながりました。そしてまた、それがより一層スタッフの成長を促すことにつながったといえます。

- 医師全員（試用期間中の者は除く）が、新生児救命処置訓練および試験を完了しました。
- 医師1名と看護師1名が、小児期疾病総合管理のトレーニングを受講しました。
- 5名の医師がビエンチャンでの研修医プログラムに参加。昨年8月からプログラムに加入した2名が、入学試験で1位と3位の成績を獲得しました。
- 3名の医師が、小児心臓専門医より超音波検査と診断について学びました。
- 医師1名が全国小児学会で肺吸虫症に関する発表をし、高い評価を得ました。
- LFHCはラオスでのALPS（自己免疫疾患）トレーニングプログラムの拠点となっていましたが、コロナにより一旦は休止に。その後、オンラインでの継続が可能になり、他病院へも緊急トレーニングプログラムを提供しました。
- LFHCにメディカルアシスタントの学生を受け入れ、研修を行いました。
- 医師2名が、大学で講義を行いました。
- 医師2名が、ビエンチャンの小児病院で医療ワークショップを行いました。
- セーブ・ザ・チルドレンと協力し、ルアンパバーン県内の5つの郡で、「救急トリアージと処置」のトレーニングを実施しました。
- コロナのスクリーニングおよび管理とPPE（感染予防具）に関する複数のトレーニングセッションが政府とWHOにより実施され、LFHC医療・看護チームから代表者が参加。それを基にLFHC内でも同様の研修が行われました。

「ラオス北部地域における小児栄養失調に対するケアの改善」プロジェクト

栄養失調のケアの質を向上させることを目標として、2018年に公益財団法人日本国際協力財団の「国際協力NPO助成」に採択され開始したこの3年に及ぶプロジェクトは、2020年に最終年度を迎えました。2020年はコロナの影響を大きく受け、感染予防と感染者受け入れの態勢を整えることが最優先となり、計画の変更を余儀なくされました。しかし、ラオス人スタッフが中心となって、栄養失調の正確な診断とケアプランを立てることを着実に実施した結果、自主性や判断力を成長させる機会となりました。また、専門家による教育をオンラインで行えるよう院内環境の整備を行ったことで、教育の幅を広げることができました。プロジェクトは2021年の3月に終了しますが、今後もラオス保健省と協力して、ラオスの栄養失調問題に取り組んでいきます。

予防 OUTREACH

ラオス

アウトリーチプログラムの主な活動は、院内にいる患者さんがスムーズに退院できるようサポートし、退院後も健やかに過ごせるようなフォローアップを行うことです。

2020年はラオスでもコロナ禍によりロックダウンが実施されました。幸い約1か月強の期間で済みましたが、郡をまたぐ移動が厳しく制限され、移動に際しては保健局からの許可書も必要になりました。これは、アウトリーチの活動にはとても大きな障害です。苦肉の策として、命に直結するような気がかりな患者さんを選び、限定的な訪問活動を行うこととなりました。たとえば、両親共に知的障がいがあり障がいがある乳児に粉ミルクの経鼻授乳ができない家庭や、ガン末期で緩和ケアが必要な患者さんなどです。

こうした経験は、地域との連携の重要さを再認識する機会となりました。以前から地域のヘルスセンターや郡病院と連絡を取り、協力体制を築く努力を重ねてきましたが、今回のような緊急事態下では、患者さんのフォローアップを地域の方々におまかせするしかありません。必然的に関係が強化されることとにつながりました。

LFHCだけではできることは限られますが、地域との連携はその幅を広げることを可能にします。将来的な現地へのハンドオーバーを見据えても連携は必須となり、スタッフにもそうした意識が芽生えてきているように思います。

- 年間訪問のべ件数：334件
- 1年間の総走行距離：30,234km（地球3/4周の距離に相当します）
- 栄養失調、脳性麻痺、HIV感染症、ガン末期、難病、社会的な問題を抱えた患者さん、亡くなった患者さんの家族のために訪問看護を行いました。
- ある難病を抱えた患者さんが住む村で、アウトリーチスタッフ、栄養士、理学療法士、チャイルド・ライフ・セラピストが協力して、『子供の日カーニバル』を緩和ケアの一環として開催しました。
- スタッフの退職に伴い、ソーシャルワーカー1名、カウンセラー 1名の新しいスタッフがチームに加わりました。
- コロナ禍によるアウトリーチプログラム部長の長期帰国中、Zoomとメッセンジャーを駆使し、ケースカンファレンスや情報共有をして乗り切りました。

緩和ケアの訪問ケース

K君は、身体の筋力が徐々に衰えていく進行性の難病に罹患しています。当初の進行はゆっくりでしたが、この1年で一気に病状が悪化してしまいました。歩くことが難しくなったため車いすを提供したものの、次は手を上げることが困難に。行動に制限があると、大好きだった学校にも行けません。最近のK君は寂しそうで、その様子を毎日見なくてはならないご家族は、K君がいないところでは涙を見せることがありました。

こうした状況を目にすると、アウトリーチスタッフも、自分たちの活動に行き詰まりを感じてしまいます。自分たちは何もできていないのでは？訪問する意味はあるのか？と、思い悩んでしまうのです。そこでまず、「私たちに何ができるかな？」と、頭を切り替えました。そして出てきたアイデアが、「子供の日にカーニバルをやろう！」ということでした。

チームで企画を練り、K君がお友達と一緒に楽しめるゲームやランチ作りなどを行うことに決定。村長さんをはじめ村の人々にも協力をお願いしました。当日は、準備を含め村のみんなを巻き込んだ大イベントとなり、この日を楽しみにしていた子供たちは大盛り上がりです。K君の顔にも久しぶりに笑顔が戻り、その笑顔を見たスタッフたちも、一緒に楽しみを分かち合うことができました。

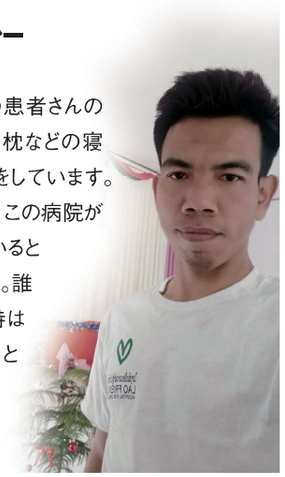
こうした貴重な体験は、活動に自信が持てずにいたスタッフに喜びや満足感を与え、次のケアへの励みとなります。またひとつ、活動の可能性が広がったことを感じました。

スタッフ紹介

私たちが ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）で働いています!

●警備員／カムラ・コングシー

行ってみたい国＝イギリス



警備の仕事のほか、入院中の患者さんの家族が病院にいる間、毛布や枕などの寝具セットや蚊帳を配る手伝いをしています。LFHCで働き出して4年ですが、この病院が地域社会に大きな貢献をしていると実感できた時が、一番幸せです。誰かとコミュニケーションを取る時はいつも、「礼儀正しく」ありたいと思いながら接しています。

●アウトリーチスタッフ／ブンミー・リー

行ってみたい国＝オーストラリア

私の仕事は、アウトリーチチームの一員として患者さんと家族の問題を解決することです。病院の中だけにとどまらず、遠くの村まで遠征して問題解決に当たります。患者さんや家族を励ますことも大切な仕事です。病気やけがの状態がよくなったり、心配事が少なくなったりして子供たちが笑顔になると、とても幸せな気持ちになります。

●看護師／ポングエン・ブンティダ

行ってみたい国＝日本

外来看護師として働き始めてから、もうすぐ3年になります。LFHCには多くの患者さんが訪れますが、これはとても素晴らしいことです。体の具合が悪くなった時に、気軽に病院にかかれるのですから！仕事はチームワークが一番大事だと思うので、スタッフみんなで協力し合いながら、頑張りたいです。

●看護師／カンマン・バナラード

行ってみたい国＝日本・シンガポール・スイス・アメリカ

LFHCに勤務して5年、新生児病棟で看護師をしています。病院ではチームの仲間と共に働き、患者さんを看護します。患者さんの笑顔を見るのが大好きで、ご家族と話をするのも好き。だから、好きな言葉は「チームワーク」と「スマイル」です。仕事を通じて色々な経験をすることで、自分をより向上させることができるはず。そう思って日々頑張っています。

●看護師／カムハック・ポウムシー

行ってみたい所＝ハワイ

（みなさんには私の故郷、ラオスのチャンヌエアをおすすめします！）

LFHC開院前からの初期スタッフです。この病院の看護チームの一員になれてラッキーでした。仲間たちは、まるで家族のようですよ。助け合いながら一緒に働けることが嬉しいです。患者さんの笑顔、スタッフの笑顔、LFHCでみんなの笑顔をもっと見たいと思います。好きな言葉は「ありがとう」です。

●ハウスキーパー／センペット

行ってみたい国＝どこでも！どこに行っても楽しめる自信があります。

清掃担当として5年10ヶ月経ちました。私は医療スタッフではありませんが、患者さんたちが元気になっていく姿を見るのが嬉しいです。苦しんでいる姿を見た時は、何かしてあげることはできないだろうかと、もどかしい気持ちになったりもします。つらい時は大好きな甘いデザートを食べて、やる気アップ！

●医師／ソンポンケオ

行ってみたい国＝日本・アメリカ

約3年前から、シニアドクターとして働いています。子供好きなので小児科医になりました。LFHCで働くことで、医師としての知識が高まり、患者さんをより理解できるようになったと思います。それから、英語も上達しました。「毎日ベストを尽くす！」が信条です。その積み重ねで成長していけたらと思います。

●医師／ブンマ・セングマニー

行ってみたい国＝日本

ぜひ、愛称の「リー」と呼んでください。5年前からシニアドクターとして勤務しています。私の主な仕事は、救急病棟とICUで子供たちによりよい治療をすること。LFHCの医療の質は素晴らしく、ここで働けてよかったと思います。また、よかったことは他にもう1つ。それは、スタッフが第2の家族のようだということです。すべての人が健康になるよう、みんなで力を合わせて治療に取り組むことができます。

●医師／ソンハー

行ってみたい所・国＝万里の長城・富士山・ベトナム

シニアドクターとして、LFHCで約6年働いています。病院の患者さんが多い状況を喜ぶというのは複雑な気がしますが、でも、語弊を恐れずに言うと、多くの患者さんが来院するのを見ると嬉しくなります。できるだけ多くの患者さんに、よりよい治療を施したい。LFHCなら、それができると思います。そのためにも、私たちは日々、学ばなければなりません。だから、好きな言葉は「学習」です。

●総務／ビライコン・ビヤコン

行ってみたい国＝アメリカ

「プイ」と呼ばれていますので、私に声をかける時はそう呼んでくださいね。LFHC開院当初から勤務し、会計を担当しています。LFHCは、子供たちに無料で医療を提供しているところが素晴らしいです。そして私自身は、様々な新しいことを学び、外国人と一緒に働き、やりがいのある仕事をしていると感じています。私は「人生は短い、だから今日もできる限り頑張ろう」という言葉が大好き。その言葉の通り頑張れたら素敵だと思います。

ラオ・フレンズ小児病院(LFHC)の患者さんストーリー

症 例 紹 介

Nちゃんの症例

アウトリーチの訪問目的は様々で、その中の一つが緩和ケアを自宅で行うケースです。悪性の疾患や進行性の難病のために治療方法がない、または経済的理由により治療を受けることができず自宅で終末期を迎える患者さんに対して、痛みをはじめとする様々な苦痛の緩和のためにご家族と一緒に取り組みます。

左の膝が痛み、よくならないと言って来院したNちゃん。検査の結果、下された診断は骨肉腫でした。今後の治療にあたり経済的な問題も懸念されましたが、それ以上に問題だったのは、予想以上に病気の進行が早かったことです。わずかの間に左足の腫れと痛みは増強し、転移の症状も加わって、誰が見ても終末期とわかる状態に陥ってしまいました。もはや治療は難しい状況で、ご家族とも話し合った結果、家庭での緩和ケアを行うことになりました。

Nちゃんの住む村までは、ルアンパバーンから車で半日ほどかかります。1泊2日での訪問看護を予定し、鎮痛剤やガーゼ、包帯などをたくさん準備して向かいました。家に着くと、伝統医療の儀式を行ったらしく、儀式に参加した村の人々も残っていました。Nちゃんは、以前よりさらに悪化しているのがひと目でわかる状態。それでも、時間をかけ、ゆっくり色々な話をしてくれます。

全身の痛みが一番つらいこと、足に当てているガーゼがすぐに汚れてしまうのがとても嫌なこと、友達と一緒にまた学校へ行きたいこと、食べたいものはリンゴにオレンジに豆乳、そして、細身で裾が広がったジーパンをはきたいと思っていること。苦しい呼吸をしながらも、お茶目な表情で話してくれました。Nちゃんのお父さんが濡らしたタオルで発熱のある身体を拭いていて、お母さんがその後ろに不安そうに控えていました。部屋の中にはNちゃんを心配した村人たちがたくさん集まり、Nちゃんを見つめています。

Nちゃんの看護を終え、家から少し離れたところで、お父さんにNちゃんの今の状況と今後の予測を伝えました。お父さんはとても明るい性格なのですが、元気だったNちゃんがたった5か月で今のような状況に陥ったことに、気持ちが追いつかない様子です。

翌朝、Nちゃんが食べたいと言っていた食品と細身のジーパンを購入してお父さんに渡し、私たちはNちゃんに何ができるかを考えながらルアンパバーンへの帰路につきました。Nちゃんが息を引き取ったという連絡が入ったのは、それからわずか数日後。まさに今後のケア計画を練っている最中のことでした。

その後、ご家族へのフォローアップのために再訪問した際、私たちの訪問の翌日に、Nちゃんがひとつの物語と絵を書き(描き)残していたことを知りました。ご両親は字が読めなかったため、読み聞かせたのはスタッフです。亡くなる直前の彼女が何を思っていたのか本当のところは誰もわかりませんが、誰もの心にNちゃんは強く残りました。

Nちゃんのケースが、スタッフが緩和ケアについて考える大きな転換点となったのは確かです。緩和ケアとは何？どうして必要なの？亡くなった後も続くのはなぜ？……経験から得たものは、机上の学びや誰かの指示とは別次元からの問いかけになります。たとえ辛くとも、多くの経験をすることでスタッフは、患者さんや家族と向き合えるよう成長していくのです。

※Nちゃんが書き残した物語は、他媒体(webサイトなど)で公開しています。

アンコール小児病院への支援

カンボジア

アンコール小児病院(AHC)は1999年に当団体が設立、運営していましたが、当初の予定通り現地化を果たし、2013年からはカンボジア人による運営となりました。現地化後も私たちは、助成事業として、AHCの教育プロジェクトと地域保健医療プロジェクトに支援を続けています。

© Angkor Hospital for Children

【教育プロジェクト】

2020年は年間を通して、新型コロナウイルス感染拡大による影響が教育活動への大きな障害になりました。しかしながら、様々な工夫と努力で教育を継続。海外からの外国人ボランティアがAHCに来ることができなくなったために、一部の研修はオンラインで海外の専門家に繋いだり、カリキュラムに従って自主的に学んだりして進めました。

AHCスタッフへの教育

- ◉継続的な医療教育：上半期のべ3,038名、下半期のべ4,234名参加。
- ◉継続的な看護教育：上半期のべ3,248名、下半期のべ3,813名参加。
- ◉医師と看護師各9名が、技術向上のためカンボジアの全国大会に参加。
- ◉専門分野における再教育研修を実施。

院外の医療従事者への教育

- ◉6名の医学生に、1年間の教育プログラムを提供。
- ◉医学生、薬学生、助産学生などがインターンシップに参加。
- ◉国際大学の2名の医療学生に、半年間のフェローシッププログラム研修を提供。
- ◉地域のトレーニングセンターから、看護師や歯科看護師がインターンシップに参加。
- ◉個人経営の診療所の医師と看護師に、ライフサポートに関する研修を実施。
- ◉政府系施設の看護師、保健センターの看護師に、ワークショップや研修を実施。

【地域保健医療プロジェクト】

農村部における子供の死亡率を下げ、子供たちが健康で充実した生活を送ることができるよう、地域コミュニティの人々と共に啓発活動に取り組んでいます。2020年はコロナ禍による政府の方針で3月上旬に全ての学校が閉鎖、コミュニティの活動も全停止となってしまいましたが、予定通りの活動ができなかった反面、コロナ対策としての感染予防教育を緊急案件として行うことができました。

- ◉のべ1,029名の教師に対し、研修やトレーニングを実施。主なテーマは、歯科衛生、応急処置、水と衛生など。
- ◉のべ11,325名の小学生に、保健衛生教育を実施。
- ◉テレビを利用したヘルスプロモーションセッションに、小学生のべ2,498名が参加。
- ◉楽しく健康を学ぶイベント“Happy Child Day”を開催し、小学生279名が参加。
- ◉医療(Treatment)教育(Education)予防(Prevention)の活動用トラック=通称TEPトラックを活用し、小学生に歯科衛生教育と歯科治療を実施。
- ◉小学生の眼科検診と、目に関する教育を実施。

外来患者総数	82,743人
入院患者数	3,226人
救急外来患者数	14,076人
集中治療室患者数	1,182人
眼科患者数	12,669人
歯科患者数	33,653人

※のべ人数

コロナ感染予防活動

パンデミックは、カンボジアでも大きな影響がありました。職を失う家庭もあり、満足な食事が摂れず、栄養失調に陥る子供の数が増えています。また、感染を恐れて病院を遠ざけた結果、病状が悪化した状態で来院するケースも増えました。

AHCでは、農村部におけるコロナ感染予防のため、対象地域にて手洗い指導を実施。合わせて石鹸と予防啓発のパンフレットを配布しました。また、手洗いと衛生について、公共放送を使った情報配信も行いました。

ラオ・フレンズ小児病院

赤尾和美 Kazumi Akao 看護師の 2020年の出来事から

スーパーマンも手洗いゴシゴシ

先日、手洗い励行がほんとの手洗い励行になったとブログで書いたのですが、昨日から毎朝、外来の患者さんに手洗い指導をするようになりました。まず、手洗いがなぜ必要なのかを説明して、病院の手洗いポスターを使って、指、爪の中、手首までしっかり洗う方法をステップごとにデモンストレーションします。そのあとに一人ずつ一緒に洗ってもらいます。今日はちびっこスーパーマンも手洗い練習です。
手洗い後は、特別な手になったかのように腕を伸ばして見上げていました。洗ったら特別な手になる！これ、いいですよね～。みんなに見せびらかしていましたよ。これまで全然根付かなかった『手洗い励行』がこんなに定着するなんて、さすが、コロナパワー！この習慣が根付けば、この国の感染症で苦しむ子が激減するんじゃないかなー。期待しましょう！

コロナ対策万全

ラオスでの最初のコロナ感染報告は3月24日でした。LFHCでもいつ感染者対応をすることになるかわかりません。保健局からの指示で防御ガウン、マスク、ゴーグルにキャップをかぶっての対応となりました。外来では入り口の外でスクリーニングをする体制に配置を変え、またスタッフは感染対策のためのシュミレーショントレーニングをして備えることになりました。
万が一ラオス国内で感染が広がるようなことがあれば、一気に拡大する可能性が高いと予測されます。マスクや手洗いの水さえ入手することが難しい地域が多い上、医療体制も整っていないからです。とにかく、水際で食い止めなければなりません。

Zoomでミーティングも

私も4月に急遽日本へ戻ることとなり、現地のアウトリーチスタッフとはZoomでやり取りすることになりました。最初は不安そうでしたが、口うるさいおばばがいないので、ノビノビしているようでした。見なくていいところは見えないのがちょうどいい距離感ですね。見てしまえば黙っていられない質なので、もしかしたらそれが、スタッフの成長を妨げることになっていたのかも。自分で色々と経験をして、自分で感じることが大事なのだと思います。お陰で頼もしいほど成長しました！ Zoom中にバチリ！

初オンライン教育セッション

ロックダウンに伴い、ラオス人スタッフを指導するために滞在していた外国人専門家が緊急帰国してしまいました。LFHCの運営は、将来ラオス人だけで活動を継続できるように、現地スタッフを育成することが大きな目的でもあります。スタッフ教育をどうにか継続したいと、日本のロータリークラブのご支援をいただき、オンライン教育のための機材を購入し、新しい教育の形を始めました。

地域への貢献

LFHCは、院内での診療はもとより、地域での健康増進・維持への貢献も重要な活動の一つと考えています。今年のコロナのパンデミックを受け、地域のニーズにこたえるべく、市内のレストランでスタッフへ手洗い指導を行いました。その際に用いた、手洗いがしっかりできていないことが目で見て分かるツールには、みんな驚いていたようです。
また、フードフェスティバルでは病院のブースを開設し、手洗いのデモンストレーションを行いました（写真左）。通りがかりの人たちと日常会話を交えながら、ポスターを使って手洗い指導。
いずれも、コミュニティとのつながりを感じる良い機会になりました。

5周年記念式典

今年はコロナの騒動が頭を占領してしまい、ラオ・フレンズ小児病院(LFHC)の記念すべき5周年記念のことがすっかり遠い昔のように感じられます。
こじんまりとした式典でしたが、恒例の子供カーニバルは開催しましたので、たくさんの子供たちに楽しんでもらうことができました。ちょうど式典の後くらいから、コロナによりとても大変な状況となりましたが、しかしそれは、必ずしもネガティブなことばかりではなかったと思います。転んでもただでは起きないのがフレンズです！
LFHCはもうじき丸6年を迎え、7年目へのスタートとなります。どんな年になるでしょうか。きっと何か良いことがまたあるはずです。
今はみんなが集まってお祝いすることができませんが、ハグして、大声で笑って、1年の成果をみんなで祝える日はもうそこまで来ていると信じています。

フレンズJAPAN 事務局の1年

全世界がそうであったように、新型コロナウイルスの感染拡大により、活動が制限された1年でした。当団体も一時は事務局を閉鎖し、スタッフは全てリモートでの勤務形態へ。緊急事態宣言解除後は、出勤を交代制にするなどして業務に当たりました。ボランティアの受け入れを停止したり、イベントを中止もしくはオンラインで行ったりと、想定外の事態が次から次へと起こる状況。けれども、制限があることから発案された企画や新しい試みに、果敢にチャレンジできた1年でもありました。苦境を苦境のままでは終わらせたくない、との思いで乗り切った1年だったと思います。

1月

入院治療費寄付キャンペーン（2019年12月～）終了

患者数が増加傾向にあるラオ・フレンズ小児病院（LFHC）の、入院治療費を集めるキャンペーンを2ヶ月に渡り展開。70人以上の方々から、約135万円のご支援が集まりました。

2月

フレンズ応援団 ミーティング@事務局

フレンズの活動を応援するグループ“フレンズ応援団”の主催で、ミーティングが行われました。“フレンズ応援団”は、団体の認知度を上げよう、もっと気軽に支援活動ができるようにしよう、と声をあげてくださった方々により結成されたグループです。ミニイベントや小旅行を企画して支援につなげたり、スキルを活かしてできることを持ち寄ったり、ゆるく楽しく支援の裾野を広げてくれています。誰でも参加可能。ミーティングには、学生、社会人、職業や性別・年齢もマチマチなメンバーが集まります。ご興味がある方は、ぜひご参加ください。

3月

月刊「赤ちゃんとママ　3月号」に赤尾和美のインタビュー記事掲載

5月

オンラインフレンズトークライブvol.1「原点と未来」

赤尾とゲストのトークを生配信。第1弾のゲストは、カンボジア時代から赤尾を撮影してくださっているフォトグラファーの内藤順司さん。内藤さんが撮影した写真を画面共有しながら、撮影当時の思い出話を交えて、写真の背景にあるものや感じたことなどをお話いただきました。

very50主催オンライントークライブ「WASH OUT!!LIVE」

very50は、様々なプロジェクト型教育プログラムを提供されています。ライブ配信イベントにお声がけいただき、赤尾和美がゲスト出演しました。

6月

オンラインフレンズトークライブvol.2「途上国からの学び」

赤尾とゲストのトークを生配信。第2弾のゲストは、東京女子医科大学国際環境・熱帯学講座教授/講座主任の杉下智彦先生。杉下先生は、カンボジアのアンコール小児病院（AHC）立ち上げ時より、医師として関わってくださいました。現在は、アフリカを中心に30カ国以上の途上国で保健分野に携わっていらっしゃいます。AHC時代の懐かしいエピソード、伝統医療、途上国の医療体制やコロナ対策などをお話いただきました。

オンラインフレンズトークライブvol.3「GiveとShare」

赤尾とゲストのトークを生配信。第3弾のゲストは、毎日放送海外ビジネス部の楢原祥光さん。1997年から2000年にかけて、当時は報道局に在籍していた楢原さんが中心となって、AHCの建築から開院までを追ったドキュメンタリー番組を制作してくださいました。当時の映像と、現在の主な活動地ラオスの映像を画面共有しながら、カンボジアからラオスへどのようにプロジェクトが引き継がれたかを語り合いました。

クラウドファンディングにチャレンジ

「コロナショックを乗り越え、ラオスの小さな命を守り続けたい。」を掲げ、5月から6月にかけてチャレンジしました。196人の応援を得て、目標金額300万円をクリア！あたたかいご支援と応援に感謝申し上げます。

7月

東京マラソン2021 チャリティ寄付先団体に選出

9月

TOKYO FM「The Lifestyle MUSEUM」に赤尾和美がゲスト出演

ピーター・バラカン氏がメインパーソナリティーを務めるラジオ番組に呼んでいただき、ラオスの医療事情や、それを踏まえての活動内容などをお話しました。

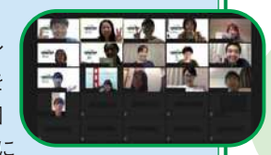
オンラインフレンズ活動報告会

毎年夏に、事務局にて活動報告会と交流会を行っていましたが、コロナ禍で開催できないため、オンラインで実施。オンラインになったことで、普段は東京の事務局に足を運ぶことができない遠方の方にもご参加いただくことができました。

フレンズ応援団主催オンライン交流会「カンボジアの文化を知ろう～お盆編～」

フレンズ応援団の企画・主催イベントです。お盆を迎えたカンボジアを、現地在住、オークンツアー代表の横須賀愛さんが動画で紹介。オンラインツアーでカンボジアのお盆を体験できる内容でした。

フレンズ学生インターン/ボランティア主催オンラインイベント「Connection～学生×NPO×ラオス～」



学生インターンと学生ボランティアが企画し、開催。ラオスを活動地とする他の非営利団体やJICA海外協力隊の方々にもご参加いただき、クロストークする内容でした。

10月

At-Homeチャリティ・イベント

毎年秋に、LFHCへの支援を目的として開催していたチャリティ・ガラディナーに代わり、オンラインでのイベントを行いました。ライブ配信、オンライン・オークション、アジアンマーケット、オンライン寄付を通じて、419万円以上のご支援が集まりました。あたたかいご支援と応援に感謝申し上げます。

12月

伊藤園通販サイト健康体タイアップ企画始動

「お～いお茶」などで知られる飲料水メーカー（株）伊藤園様からご提案いただき、フレンズとのタイアップ企画が始まりました。詳しくはP21をご参照ください。

How to Support

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPANの活動は、皆さまのご支援により支えられています。

支援方法をお選びいただけます

◉正会員
年会費　個人12,000円
　　団体・法人30,000円
（年度ごとに更新・活動への議決権あり
・入会申込書あり）

◉賛助会員
年会費6,000円（支払月より1年間）

◉学生賛助会員
年会費3,000円（支払月より1年間）

◉マンスリーサポーター
500円から自由に金額指定
（毎月、クレジットカード、指定口座より引き落とし）

◉一般寄付（金額・回数自由）

※ご寄付には税制の優遇措置が可能な領収証を発行します。

※銀行振込や、インターネットからのカード決済も可能です。

皆さまの支援でこんなことができます

500円	医師や看護師用の使い捨て手術着1着
1,000円	粉ミルク2週間分
3,000円	首都ビエンチャンへの患者さんの往復交通費1人分
5,000円	手術に使用する麻酔薬1回分
10,000円	1人の患者さんの入院費2日分
30,000円	院内薬局の運営費（薬代+スタッフ人件費）1日分

※1ドル＝120円の場合

マンスリーサポーターって何?

マンスリーサポーターになると、決まった金額が毎月、クレジットカードまたはご指定の口座から自動的に引き落とされます。「継続的に支援したい」「小さな金額で無理なくコツコツと支援したい」「年会費の振り込みを忘れがち」といった支援者さんからの声にお応えし、誕生しました。500円以上の金額を、ご自由に決めていただくことができます。

＜お申し込み方法＞

■クレジットカード決済をご希望の方
右のQRコードもしくは以下にアクセス
https://congrant.com/credit/form?project_id=1658

■口座振替をご希望の方
フレンズ事務局までお問い合わせください。

こんな支援方法もあります

◉寄付型飲料自販機の設置
自動販売機でドリンクを買うと、その代金の一部が自動的に当団体への寄付になります。これは、コカ・コーラ ボトラーズジャパン（株）様と（株）伊藤園様が社会貢献活動として行っているもので、利益の一部が支援団体への寄付金となるシステムです。この寄付型自動販売機を設置してくださるお店や会社を募集しています。

◉健康ドリンクを購入
「お〜いお茶」などで知られる飲料水メーカー（株）伊藤園様とのタイアップ企画を開始しました。
「伊藤園　健康体　契約企業専用サイト」
https://www.kenkotai.jp/shop/a/abbcT044/
このサイトでは優待価格で商品をご購入いただくことができ、また、その売上の7%がフレンズに寄付されます。「伊藤園　健康体」は、毎日の健康を積み重ねる良きパートナーとして、健康飲料や健康食品、サプリメントなどを扱っているオンラインショップです。健康増進を図ることが支援につながりますので、ぜひご利用ください。

◉本やCD/DVDを「ありがとうブック」に送付
家で眠っている本やCD、DVD、ゲームソフトを合わせて30点以上、宅急便の着払いで「ありがとうブック」に送ると、その買取代金が当団体に寄付されます。新品・中古は問いません。部屋を片付けて寄付につなげましょう。
詳細ページ
https://www.39book.jp/supporter/2095/

◉プロボノ募集
チラシやDM制作、マーケティング調査、ファンドレイジング、広報活動等、様々な分野でご協力いただけるボランティアを募集しています。専門のスキルを活かしたボランティアをしてみたい方、ぜひご連絡ください。

フレンズ関連書籍のご案内

赤尾和美著
「この小さな笑顔のために
〜日本人ナースのカンボジア奮闘日記〜」
¥1,540（税込）
現在はラオ・フレンズ小児病院で活動する赤尾看護師が、アンコール小児病院時代に執筆した奮闘記。東南アジアにおける医療現場の臨場感だけでなく、カンボジアの人々の暮らしを眺めるような、紀行的味わいも感じることができる名著です。

宮本敬文写真集
「GIFT to children of Angkor」
¥2,750（税込）
雑誌や広告写真で注目され多くの有名人を撮影して作品を残し、周囲に慕われながらも夭折した宮本氏。生前、アンコール小児病院の活動に共感し、何度もカンボジアに足を運んで撮影した渾身の写真集です。

※これらの書籍は現在、書店等での取り扱いはございません。
ご購入希望の方は、フレンズ事務局までお問い合わせください。

ユニセフ「世界子供白書2019」より抜粋	日　本	ラオス	カンボジア
新生児死亡率	1%	23%	14%
5歳児未満死亡率	2%	47%	28%
妊産婦死亡率	5人	185人	160人
平 均 寿 命	84歳	68歳	70歳
衛生的な飲用水源を利用している割合	99%	82%	79%
適切なトイレ設備を利用している割合	100%	74%	59%

※新生児および5才児未満の死亡率は、出生数1,000人あたりの死亡数。
※妊産婦死亡率は、出生10万人あたりの死亡数で、
当該時期に妊娠関連の原因により死亡した事例が対象。

2020年度　活動計算書

2020年1月1日～2020年12月31日
特定非営利活動法人　フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN

（単位:円）

科　目	金　額		
Ⅰ　経常収益			
1　受取会費			
正会員受取会費	588,000	588,000	
2　受取寄付金			
受取寄付金	85,436,305	85,436,305	
3　助成金収入			
助成金収入	4,695,230	4,695,230	
4　事業収益			
普及活動収入	76,000		
収益事業収入	685,298	761,298	
5　その他収益			
受取　利息	8,591		
雑　収　入	193,126	201,717	
経常収益　計			91,682,550
Ⅱ　経常費用			
1　事業費			
(人件費)			
給料　手当	5,471,714		
法定福利費	1,725,816		
人件費計	7,197,530		
(その他経費)			
支払寄付金			
助成事業	41,127,692		
医療施設運営・教育・予防事業	39,691,732		
賃　借　料	1,761,008		
水道光熱費	165,950		
通信運搬費	87,734		
広告宣伝費	779,830		
旅費交通費	469,613		
消耗品　費	456,586		
印刷製本費	650		
支払報酬	600,000		
研　修　費	40,340		
福利厚生費	76,655		
保　険　料	35,020		
諸　会　費	13,200		
支払手数料	660,626		
雑　　費	7,757		
リース料	120,680		
イベント経費	416,701		
為替差損	426,728		
【売上原価】			
期首棚卸高	455,310		
期首商品・製品棚卸高　計	455,310		
仕　入　高	△ 500		
当期仕入高　計	△ 500		
期末棚卸高	△ 454,075		
期末商品・製品棚卸高　計	△ 454,075		
売上原価　計	735		
その他経費計	86,939,237		
事業費　計		94,136,767	
2　管理費			
(人件費)			
給料　手当	1,727,912		
法定福利費	544,994		
人件費計	2,272,906		
(その他経費)			
賃　借　料	556,112		
水道光熱費	96,906		
通信運搬費	102,908		
旅費交通費	16,147		
消耗品　費	223,706		
支払手数料	1,155,621		
支払報酬	638,000		
福利厚生費	58,299		
保　険　料	25,000		
会　議　費	2,012		
雑　　費	10,767		
リース料	38,106		
交　際　費	21,450		
その他経費計	2,945,034		
管理費　計		5,217,940	
経常費用　計			99,354,707
当期経常増減額			-7,672,157
Ⅲ　経常外収益			
経常外収益　計			0
Ⅳ　経常外費用			
経常外費用　計			0
税引前当期正味財産増減額			-7,672,157
法人税、住民税及び事業税			70,000
当期正味財産増減額			-7,742,157
前期繰越正味財産額			45,161,789
次期繰越正味財産額			37,419,632

2020年度役員

代　表
赤尾　和美（看護師）

副 代 表
井津　建郎（写真家）

理　事
戴　波留美
高橋　大輔
（三光ソフランホールディングス（株）取締役
メディカルホットライン（株）代表取締役
医療法人誠光会　ひかりクリニック　理事
社会福祉法人誠高会　さくらんぼ保育園　理事）
竹地　春海
（中山身語正宗　参与、大本山瀧光徳寺　寺務長）
中小路　太志
堀　成美（感染症対策コンサルタント）
松島　彰雄（前代表）
渡辺　淳子

監　事
熊井　昌広（会社執行役員）

2020年度正会員

和泉　直子	（宗）泰宗寺
一乗　朋美	高橋　俊晴
大角　雄三	太刀川　雅子
大塚　洋子	（株）ナース・ステーション
大松　誠二	猶原　祥光
（株）岡興産	（医）中野こどもクリニック
小川　直美	新見　香
小川　弥生	則包　哲
小澤　誠	バイン（株）
加藤　美里	橋本　朋子
加藤　嘉哉	平岩　町子
兼子　思	廣瀬　佳正
熊井　貴美	藤井　立秀
熊井　昌広	藤井　哲夫
（株）熊谷組	真弓　バラカン
小山　達雄	水谷　祐子
笹井　良太	メディカルホットライン（株）
（医）誠光会ひかりクリニック	山田　秀一
関岡　俊二	

FRIENDS
WITHOUT A BORDER

（認定）特定非営利活動法人
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町16-8 共同ビル7F
TEL/FAX:03-6661-7558　friends@fwab.jp　www.fwab.jp

Photo credit / Adri Berger